

## 概要

- 大栄西瓜は令和元年に、地理的表示（GI）産品として登録された。しかし、高齢化等によりここ10年余で栽培面積は15%、栽培戸数は22%減少しており、**産地維持には新規栽培者や、後継者の確保が急務**である。
- 令和3年に将来ビジョンを策定し、**100万玉の維持**と、5年間で**新規就農者23人の確保**を目標とした。
- 令和4年には新規就農サポート部を新設するなど、就農者確保のための情報発信を積極的に行ったところ、**5年間で25人の就農者が獲得**できた。
- さらに、「**3果穫り栽培**」（多収：通常2果穫り）と「**無つる引き栽培**」（省力）の普及で、令和8年には100万玉を超えることが試算された。

## 具体的な成果

### 1 新規就農者確保のための情報発信

- 令和4年、生産部会に「**新規就農サポート部**」を設置。令和6年度には部員を**3人→4人に増員**。
- サポート部と関係機関が、新規就農者確保に関する**作戦会議**を定期的で開催。令和6年は9回開催。
- 生産者**募集チラシの詳細版**（2ページ→4ページ）を作成した。
- 令和5年からサポート部が中心となり**公式Instagramを運用**。2年間で182投稿。情報発信を行った。
- **就農相談会**は積極的に出展。過去の参加者に事前周知して参加者を募り、**産地体験会へ誘導**した。
- これらの取り組みで、令和3～7年の新規就農者目標23人に対して、**実績25人と目標を達成**した。

### 2 生産安定の取り組み支援

- 令和7年の**多収**となる「**3果穫り栽培**」実施生産者は、前年の16.4→24.4%に増加した。
- 令和7年の**省力**となる「**無つる引き栽培**」実施生産者は、前年の9.7→15.5%に増加した。
- **異常果**は、交配後に花落ち部から**細菌が感染して発生**する可能性が示唆され、資材消毒等対策を試みた。

### 3 技術向上支援

- 令和6年から、JA鳥取中央管内4西瓜生産部合同の**新規栽培者向け勉強会（西瓜セミナー）**を開催。地域を超えた栽培技術の習得や、生産者同士の情報交換が進んだ。
- 栽培面積・出荷玉数の推移をシミュレーションすると、生産者戸数は僅かずつ減少するが、無つる引き栽培の普及で面積は横這い。出荷玉数は令和6年に100万玉を下回ったが、3果穫りの増収効果で**令和8年から増加に転じ、100万玉を超えることが試算**された（図1）。

## 普及指導員の活動

令和3年  
令和4年  
  
令和5年  
  
令和6年  
  
令和7年

- 将来ビジョンを策定し、**100万玉の維持**と5年間で**新規就農者23人の確保**を目標
- 生産部に「**新規就農サポート部**」を設置
- 「**無つる引き栽培**」研修会を開催
- サポート部と連携して**公式Instagram運用開始**
- JA鳥取中央管内4生産部合同の**新規栽培者向け勉強会（西瓜セミナー）**を開催
- 「**3果穫り栽培**」研修会を開催

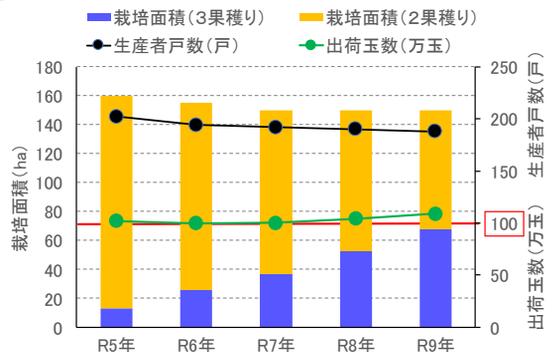


図1 栽培面積・生産者戸数・出荷玉数の推移（シミュレーション）

## 普及指導員だからできたこと

- 産地主体型の体制へと移行することで、持続可能な体制づくりが構築できた。
- 日頃から連携している生産部会、先進農業者、役場、JA、試験場、県行政など関係機関をコーディネートすることで結びつけ、産地全体の取り組みに導くことができた。

## 大栄西瓜 100万玉産地の維持・発展支援

活動期間：令和3年度～（継続中）

### 1. 取組の背景

大栄西瓜は全国的にも高い評価を受けるブランド西瓜であり、令和元年には地理的表示（GI）産品として登録された。しかし、高齢化等によりここ10年余で栽培面積は15%、栽培戸数は22%減少しており、産地規模の維持には新規栽培者や、後継者の確保が急務である。令和4年には選果場の機能向上が行われ、令和5年産から稼働を開始した。また、大栄西瓜組合協議会（以下、協議会と略）は、100万玉以上維持の方針のもと、産地振興方策の検討を重ね、新規就農者の確保と育成支援を充実させるため、令和4年に新規就農サポート部を新設した。

産地と関係機関が一体となって新規栽培者の確保、受け入れ体制を整備するとともに、出荷ロスに繋がる栽培上の課題解決が望まれている。

### 2. 活動内容（詳細）

#### （1）新規就農者の確保のための情報発信

令和4年、協議会に「新規就農サポート部」を設置したが、サポート業務をさらに強化したいことから、令和6年度総会を経てサポート部は3人から4人体制となるよう働きかけた。

##### ア 連携会議による情報共有

サポート部、役場、JA、県行政、普及所の関係機関が新規就農者の確保等に関する作戦会議を定期的で開催。令和6年は全9回開催した。

##### イ 生産者募集チラシ（詳細版）の作成

協議会が作成する「生産者募集」チラシ（冊子版）の編集会議で、大栄西瓜の後作紹介や先輩の声もあわせて盛り込むよう提案。2ページから4ページに情報量を増した。

##### ウ 協議会公式 Instagram の運用

サポート部が中心となって令和5年2月から投稿を開始し、約2年間で182投稿、フォロワー数1,254と随時情報発信を行っている。InstagramのPRチラシを作成して各イベントで配布。産地体験会後のアンケートでは、Instagramの産地情報に期待する声が増えており、引き続きリアルタイムで産地情報を発信し続けるよう継続支援した。

##### エ 就農相談会（関西、県内）への出展

協議会として県内外の就農相談会に出展し、サポート部、JAと共に参加。資料準備や当日相談を支援した。過去に参加された方々へメール等で事前周知したところ、いずれの相談会でも7～14組の相談があり、うち2～3名が産地体験会への参加に繋がった。

##### オ 産地体験会の実施

年3回の産地体験会（定植・収穫・後作）が開かれ、普及所は企画、チラシ

やHP等による周知、関係機関の事前調整、当日運営を支援した。

## (2) 生産安定の取り組み支援

### ア 玉数確保の取り組み推進

#### (ア) 多収穫り整枝方法と出荷率の解析を提案

3果穫りを行っている生産者3戸の着果や収量を調べたところ、令和6年はいずれも慣行の2果穫りと同等の着果率(90~93%)で、収量は慣行より約1割多かった。3果穫りの実践戸数は、令和6年が全戸数の16.4%だったのに対し、令和7年は24.4%で約8%増加した。

#### (イ) 省力栽培の推進支援

かねてから希望の多かった無つる引き栽培の現地勉強会(4/12、5/19)を提案し開催した。勉強会の参加者は1回目20名、2回目25名だった。園芸試験場の調査によると、無つる引き栽培の労働時間は慣行栽培に比べ約15%削減可能であることから、面積拡大による玉数増加が期待される。

#### (ウ) 異常果の原因究明

3年程前から6月中旬以降、打音の響きの悪い果実が3,000玉程度発生している。JA、園芸試験場と対応を協議し、発生がある度に現地調査を行ったり、園芸試験場にサンプルを持ち込んでいる。

症状は、収穫時に果実を半分に切ると果肉が潤んで発酵し、花落ち部(果実底面)から感染した疑いのあるものが半数以上あり、協議会役員と情報共有した。これらは機械選果で異常が検知できずに通過してしまうことから、荷受けによる打音検査を徹底することになった。その後の調査で、メロンで報告のある「果実内腐敗症」を引き起こす細菌が関与している可能性が示唆された。栽培中に使用するハサミや、果実の下敷き資材の消毒など対策を検討した。

## (3) 技術向上支援

### ア 相互圃場巡回

毎月、新規就農者の圃場を巡回。生産者自身が圃場の管理概要を説明。指導部役員、サポート部員、JAも同行し助言している。生産者自身が説明することで自身の管理の理解が深まり、活発な意見交換が行われるようになった。

#### イ 西瓜セミナーの開催

令和6年から、JA鳥取中央管内4西瓜生産部合同の新規栽培者向け勉強会(西瓜セミナー)を開催し、運営支援(全6回:3/18(交配・開花)、6/4(病害虫防除)、8/29(栽培反省・次年度計画)、11/22(土づくり・土壌診断)、12/16(圃場準備)、1/28(経営))を行った。会の合間には、生産者どうしが地域を超えて情報交換する様子が見られた。全6回開催し、延べ112人が参加した。

#### ウ 普及所管内 実技研修会

前述(2)ア(ア)および(イ)のとおり、多収となる3果穫り、省力となる無つる引き栽培法を普及するため、指導部会で研修会を提案し会場となる圃場を協議した。講師の引受先が、なかなか見つからなかったが、3果穫り普及の重要性を丁寧に説明し、根気強く説得したところ、数週間後に1人のサポート部員から承諾が得られた。

研修会ではベテランの生産者から、「大栄本来の栽培と異なるのでは？」とい

った意見もあったが、講師から苗代の低減、10%増収による所得向上見込み、慣行と変わらない着果率、栽培のメリットやデメリットを生産者の立場で伝えてもらった。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### （1）新規就農者の確保のための情報発信

将来ビジョンの令和3～7年の新規就農者目標23人に対して、実績25人で目標に達した（表2）。現在4人が親方のもとで就農を目指して研修中である。

協議会に「新規就農サポート部」を設立（令和4年2月）。様々な提案が出るようになった（部員数：R4年2名→R6年3名→R7年4名）。

研修希望者からは「サポート体制がしっかりしているので、安心して研修に取り組めそう」と好評。就農相談会の来訪者の増加により、産地体験会への誘導がスムーズになった。

表1 出荷玉数の推移（万）

年次	R3	R4	R5	R6
実績	98	102	102	99.6

表2 新規就農者数の計画と実績（人）

年次	R3	R4	R5	R6	R7	計
計画	3	5	5	5	5	23
実績						
新規就農者数	4	5	6	6	4	25
うち親元就農者数	0	4	3	2	2	11

#### （2）生産安定の取り組み支援

無つる引き栽培は、令和6年に9.7%の生産者が実施。R7年には15.5%の生産者が実施予定。慣行の2果穫りに対して、3果穫りを行う生産者は令和6年に16.4%。R7年には20%超を目指す。

異常果は、園芸試験場との調査で交配後に花落ち部から細菌が感染して発生する可能性が示唆された。早速実践できる対策として、交配後花落ち部に敷くスイカシートは消毒してから使用することになった。

#### （3）技術向上支援

新規就農者の巡回では、生産者自身が圃場の様子を説明することで自身の管理の理解が深まり、活発な意見交換が行われるようになった。また、仲間作りや、地域の先輩農家との交流が進んだ。

栽培面積・生産者戸数・出荷玉数の推移をシミュレーションした。その結果、高齢による離農が新規就農者を上回るため、生産者戸数は僅かずつ減少し続ける。ただし、無つる引き栽培の普及で、1戸当たりの栽培面積が僅かに拡大して面積は横這いとなる。

さらに、出荷玉数はR3年と6年に100万玉を下回ったが（表1）、3果穫りの増収効果で令和8年から増加に転じ、100万玉を超えることが試算された（図1）。

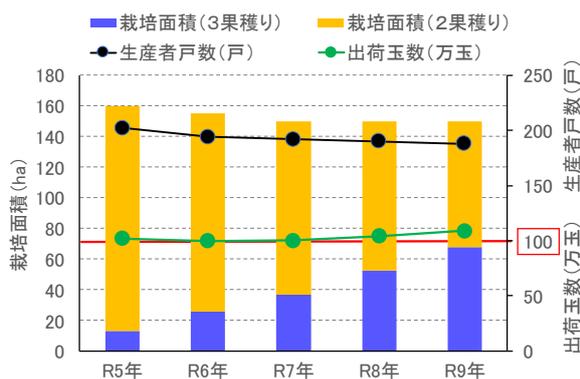


図1 栽培面積・生産者戸数・出荷玉数の推移（シミュレーション）

#### **4. 農家等からの評価・コメント（協議会役員）**

西日本の各市場から安定出荷を期待されている大栄西瓜だが、何もしないと高齢化で産地が維持できなくなってしまう。新規就農サポート部や普及所等が一体となった新規就農者確保の取り組みには大きな期待を寄せている。

また、出荷ロスを減らして100万玉出荷を維持するため、3果穫りの普及や異常果対策は喫緊の課題である。今後も引き続き目標達成に向けて支援して欲しい。

#### **5. 普及指導員のコメント**

##### **（東伯農業改良普及所・普及主幹・岸本真幸）**

新規就農者確保は、各産地が取り組み始め厳しさを増している。親元就農の掘り起こしや大栄西瓜の良さを知ってもらう取り組みを、引き続き関係機関がアイデアを出し合って企画していきたい。

また、協議会から期待の高い3果穫りや無つる引き栽培の普及、異常果の原因究明も、関係機関と連携して取り組みたい。

#### **6. 現状・今後の展開等**

##### **（1）新規就農者確保の取り組みを継続**

新規就農者確保は、地道に継続する取り組みが必要。儲かる西瓜経営をInstagram等で積極的にアピールしていく。さらに、新規就農だけでなく、親元就農の掘り起こし（成人式でチラシ配布等）も積極的に行う。

##### **（2）農業研修生受け入れ体制整備**

獲得した就農希望者に対しては、新規就農サポート部などの関係機関と連携して個別面談や研修体験による親方とのマッチングを行い、親方・研修生双方の面談を繰り返しながら確実に就農できるよう関係機関とともにフォローしていく。

##### **（3）生産安定の取り組み支援**

「3果穫り栽培」は、産地が先行して技術確立が進んでいることから、既に実践している農家の協力を得ながら指導部と連携して、図解による分かり易いマニュアルを作成する。

また、「無つる引き栽培」や「異常果対策」は、園芸試験場と連携してマニュアルを作成し技術普及を図る。

##### **（4）技術向上支援**

各地区の指導部員は、新たな3果穫り栽培や無つる引き栽培希望者のトレーナーとして、地区巡回や個別指導を行い技術普及を図る必要がある。